

序文

白内障は患者数も多く、術後に著明な視機能改善が得られることが多いことから術後の患者の喜びも大きい。新しい手術機器の開発、安全で効果的な手術手技の研究、術前・術後管理の研究などが精力的に行われ、他の眼科領域の手術と比較しても目を見張るような進歩、発展を遂げてきた。白内障手術件数は増加の一途をたどり、多くの眼科医が携わる内眼手術となっている。私が研修医として白内障手術の指導を受け始めた頃は、ようやく顕微鏡手術が一般化し、白内障手術も水晶体嚢内摘出が全盛の時代であった。当時と現在とを比べれば、手術室のベッドの上で行われている手術は同じ「白内障手術」の名のもとではあっても、まったくの別世界で、正に隔世の感がある。

現在、日本には世界中で名を知られるような術者が少なくなく、手術機器、検査機器、手術手技などにおいても日本は情報発信の中心の1つであることは疑いない。しかしながら、名だたる名医もはじめは皆初心者である。言い換えれば今現在多くの施設で白内障手術の研修をしている若い眼科医こそ、将来の白内障手術の進歩、発展を担う重要な人材である。進歩の陰には必ず苦い失敗がある。今現在、何気なく手術をこなす名人にも、手術合併症の経験は少なからずあり、それを教訓にしてさらなる手技の上達につなげてきているはずである。皆が同じ合併症を繰り返さなくても済むように、経験者は自分の経験を後進に伝える義務がある。険しい山道を登ろうと挑戦したものは、次に登る人のために「入山して最初に分かれ道は右に行ってはダメだ、行き止まりだ」「4合目の曲り道は落石が起こりやすいから注意せよ」のように、自分の経験を伝える責務がある。そうすれば次に登るものは余計な試行錯誤に時を費やすことなく、さらに安全で質の高い手術を目指すことができる。

本書は、豊富な臨床経験のある術者の先生方に、これから症例をたくさん経験するであろう若い術者を主たる対象として、自分の経験、知識をふまえて手術手技や合併症について執筆していただいた。

本書は大きく2つのパートに分けられる。前半では眼合併症を有さない白内障患者を想定し、手術中に起こる合併症、手術後に起こる合併症について、その傾向、予防策、実際に起こってしまった場合の対処法について詳述していただいた。特に臨床の現場ですぐに使えるよう、チャート化を心がけて、一般的な見解を、各項目すべて共通のスタイルで執筆していただいた。

後半では種々の合併症のある症例において、経験のある術者がどのように対処しているかを、各術者の実践している内容を自由な形式で執筆していただいた。特に本書の特徴として特筆すべき試みは、1つの項目に対して2人の著者にご執筆をいただいたことである。特殊な症例の攻略方法には唯一の正解があるのではなく、術者それぞれのやり方や考え方がある。そこで、一般的な見解をサマライズするのではなく、経験豊かな術者が実際に行っている内容を語る

ことにより、より具体的な方法が読者に示されることを期待してこのような形式をとった。内容が重複することもあるが、共通する見解だけでなく異なる見解から学ぶべきことは多いはずと確信している。

コラムとして、高齢者における白内障手術、他分野の術者からのリクエストをお願いした。白内障手術が行われた後、合併症のため、あるいは白内障とは無関係に緑内障、網膜硝子体疾患、角膜疾患を併発し、手術を要する場合がある。そのような場合、患者は時として白内障手術の執刀医の手元を離れ、それぞれのエキスパートの術者の執刀を受けることになる。その際、先に行われている白内障手術が時として次の手術の障害となり、手術成績を左右することがある。いわば、直接の術中・術後合併症以外にも白内障手術者が気をつけるべき点について他分野のエキスパートから自由な意見をいただいた。エッセイ風の執筆や、特異な経験談をご披露いただいたものもあるが、その内容は白内障手術の初心者のみならず熟練者にとっても反省すべき点、考慮すべき点を教えてくれるものであり、非常に有意義な内容となっている。

また、近年の手術管理上、不可欠となりつつあるクリニカルパスについても代表的な施設から実際に使用しているパスをご紹介いただいた。特に術者が研修医から教授まで幅広い大学病院、比較的経験者の揃っている市中基幹病院や眼科専門病院、術者が経験豊かな1人ないし2人のみの個人医院という各施設のパスをご紹介いただいた。入院手術と日帰り手術の違い、バリエーションに対する対処など、各施設の特徴が出ており、大変参考になることと思う。

本書の実質的な企画と編集は、わが国の若手の白内障手術術者を代表するといってもよい佐々木洋、林 研、原 岳、松島博之の各先生に全面的にお願いした。気鋭の先生方の編集により類書にない好著に仕上がったと自負している。最後に、手術や診療あるいは研究に多忙にもかかわらず執筆いただいた先生方に厚く御礼申し上げる。

水流 忠彦（自治医科大学）